

国境を越えて結ばれる友情と絆 〜三重の国際交流〜

三重県内には、県内に在住の外国人へのサポート、海外留学生の受入れ、国際親善の歴史の継承、未来を担う子どもたちへの支援、貧民国への国際支援などの活動を行っている団体が数多く存在します。その活動のきっかけや内容は、実にさまざまですが、その想いは共通しています。

今回は、国境を越えて友情や信頼関係を結んでいる団体のの中から6団体を紹介します。

※各イベントや展示会などの日程場所などは変更になる場合がありますので、事前に必ずご確認ください。

取材・文：中村真由美

撮影：……梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました



NPO法人 愛伝舎

「彼らは表情豊かで、必要以上に空気を読んだりしないから、窮屈じゃないのよ」と、5年間のブラジル生活を懐かしそうに話すのは、NPO法人「愛伝舎」理事長の坂本久海子さん。ブラジルから帰国して鈴鹿市内に住んだ坂本さんは、工場勤務のブラジル人をはじめとした外国人が、言葉や生活習慣などの違いから困っていることに気付くと、早速行動を開始。セーフティネットとしての法人を設立したのが、平成18年のことでした。



坂本 久海子さん*

同法人のこれまでの活動は多

【鈴鹿市東旭が丘】

岐に渡ります。たとえば「外国人介護人材育成事業」では、定住外国人の職業の選択肢を増やすために、「介護ヘルパー2級養成研修(後に介護職員初任者研修と名称変更)」を実施。合計で120人が受講しました。

また、在住外国人と母国とのネットワークを通じて、日本・三重県と海外をつなげることに力を入れて、三重の観光や三重県特産品の魅力発信や、インバウンドにつなげる取組みをしています。

そして、現在最も力を入れているのが、「夢の懸け橋奨学金事業」。これは、三重県内に定住する外国人の子どもたちが、日本の大学に進学して夢を実現するのをサポートしようというもの。毎年3月には、奨学金授与式が行われ、本年度5回目を



「介護ヘルパー2級養成研修」の様子*



「奨学生スピーチ原稿集」

迎えました。

授与式に奨学生が行うスピーチをまとめた原稿集には、大学生活を経て、キャンピングアテンダントや臨床工学技士、サウンドクリエーターになりたいなどの夢が綴られています。中には、国際ビジネスを学んで、世界中で活躍したいと夢見る、頼もし

い学生もいます。

母国と日本の2つの文化を知り、広い視野を持つ彼らは、国と国をつなぐ「夢の懸け橋」になってくれることでしょう。



「夢の懸け橋奨学金 第5回授与式」

海外留学生との「普段着の付き合い」

ホームステイ・イン津実行委員会

【津市一身田中野】

風薫る5月、三重大学や鈴鹿大学などに、留学生が多く入学してきます。その出身国は多彩で、中国、韓国、インド中東諸国など。毎年、文化も生活習慣も違う20名ほどの学生のホームステイを受入れているのが、「ホームステイ・イン津実行委員会」の皆さんです。



向かって左から、辻井 信二さん、井早 照彦さん、工藤 裕子さん

「平成元年の結成以来、活動の幅が広がって、セカンドホーム制度、『国際交流デー』、『ワイワイガヤガヤフェスタ』なども行っています」と教えてくれるのは、同会会長の井早照彦さん。お話のセカンドホーム制度とは、三重大学長期留学生との交流のこと。とはいえ特別なことではなく、食事や買い物など、普段着の付き合いをして、第2の家のように感じてもらおうのが主旨で、これまで480名以上が体験しました。

「私は、ミャンマーや中国の学生たちを受入れましたが、ミャンマーの学生の礼儀正しさに驚かされたり、中国の学生が日本の水と空気が安心でキレイ、スイーツがおいしいと喜んでくれたことなどが印象に残っています。中国からの留学生は1か月

で2キロも太ったんですよ」と、副会長の工藤裕子さん。お話から、交流の楽しさが伝わります。また、毎年10月に津お城西公園で「津市国際交流協会」と共催する「国際交流デー」では、着物の着付け教室が大人気とのこと。成人式で着られなかったという南米出身の20歳の学生に着付けをしたところ、お母さんが涙を流して喜んでくれたといいいます。



着物の着付け教室*

そして、「ワイワイガヤガヤフェスタ」とは、2月に「津リジョンプラザ・お城ホール」で行うイベント。在住外国人が主体となり、歌と踊り中心で国の文化を紹介します。

こうしたイベントに関わる中で、事務局長の辻井信二さんは、どこの国の人も民族衣装や楽器



「ワイワイガヤガヤフェスタ」*

を持参し、自国の歌や踊りなどを大切に行っているのに驚かしています。また留学生たちが喜ぶのは、地域の祭りや炬燵などといった、ごく普通の風習や生活スタイルなのだともいいます。多文化交流が、自国の文化を見直すきっかけにもなっているのです。

お問い合わせ

「ホームステイ・イン津実行委員会」
TEL 059・231・0050
(井早 照彦会長)

お問い合わせ

NPO法人「愛伝舎」
TEL 080・3667・5129
(坂本 久海子理事長)

*印の写真は取材先から提供していただきました

「答礼人形」ミズ三重の会

【津市大門】

今から90年前、アメリカからおよそ12000体の人形たちが日本に贈られてきました。当時のアメリカには、新天地を求めて移住した日本人が多く暮らしていました。文化や生活習慣の違いや誤解などから、排日的な動きが活発化してしました。しかし、こうした問題は、お互いに理解し合うことで解決できると考えたのが、シドニー・ルイス・ギューリック氏です。ギューリック氏は、日本の子どもたちに人形をプレゼントすることで、「アメリカにも日本と仲よくしたいと願う人がたくさんいるのですよ」というメッセージを託そうと考えました。そしてその想いは全米各地の人々の心を動かし、人形はわずか半年で集まったといわれています。

アメリカからのひな祭りの時

期に合わせて続々と届く人形たちを、日本の子どもたちは「青い目の人形」と呼び親しみました。全国各地で華やかな歓迎式典が行われたといえます。そして今度は、日本各地からアメリカのクリスマスに向けて、答礼人形が贈られることに。三重県からは「ミズ三重(三重子)」が贈られ、子どもたちが書いた手紙も添えられました。

時は流れ、私たちの記憶に深く刻まれた戦争を経てしばらくすると、全国各地で答礼人形を里帰りさせる活動が始まります。そうして平成20年、三重県でも「答礼人形『ミズ三重』の里帰りを実現させる会」が発足。「ミズ三重」が163通の手紙と一緒に、ネブラスカ州の州立博物館に保管されていることがわかり、翌21年には県内10都市で「お帰



答礼人形「ミズ三重」と、県内各小学校などに保管されていた「青い目の人形」※

りなさいミス三重」の展示会が行われました。この時、シドニー・ルイス・ギューリック氏の孫にあたる3世夫妻も来日。ご夫妻は、県内の各小学校に9体の「青い目の人形」が大切に保管されていることや、各地での歓迎ぶりに感動し、人形を2体寄贈してくれるなど、新たな交流が始まったのです。

「答礼人形」ミズ三重」がアメ



青い目の人形「グレース」を保管していた松阪市立豊地小学校※

リカへ贈られて90周年を迎える今年は、再び里帰りしてもらって、記念展不会を行う予定です」と教えてくれるのは、滝澤秀行さん。現在「答礼人形『ミズ三重』の会」事務局長を務める滝澤さんは、前身の「答礼人形『ミズ三重』の里帰りを実現させる会」発足当時から、その責務を果たしてきました。特に本年は、100周年を10年後に控え、もう



展示会風景※



滝澤 秀行さん

一度意義を見直すいい機会だと話します。そのため、いくつかの試みも計画。その一つは、アメリカで行われた「What's

Friends hip acti-

city」という活動展示を行う

こと。これは「あなたにとって

『友情』とは何ですか?」と問い

かけをして、自由に答えてもら

い、その内容を展示するもの。

子どもたちに限らず、大人にと

っても、改めて友情について

考えるきっかけになることで

しよう。そして、その内容をア

メリカでも見てもらおうと計画

しています。

そして特筆すべき試みは、展

示期間中に、州立博物館がある

ネブラスカ州リンカーン市と、

津市内の子どもたちとのテレビ会議。実現すれば、子どもたちが日米の歴史や、人形交換の意義を理解し、お互いに仲よくする絶好の機会になるでしょう。そしてこの試みは、会の皆さんが当初からモットーとしている「答礼人形『ミズ三重』を通じて友情と平和の精神をふりかえり、次代につなげよう」の実現にもつながります。

「ミズ三重」の90歳を記念する

展示会は、津市の「三重県総合

博物館(ミユム)」で7月11日(火)

から9月3日(日)まで開催予定。

初日には、ギューリック3世夫

妻や90年前に手紙を書いた、市

内在住の浦山ふみさんがテー

プカットを行う予定です。この

夏は、お子さんやお孫さんと一

緒に、「ミズ三重」をじっくりと

見てはいかがでしょうか。

お問い合わせ

「答礼人形『ミズ三重』の会」

TEL 090・4867・1476

(滝澤 秀行事務局長)

※印の写真は取材先から提供していただきました

平成12年、日本とミャンマー（正式名称はミャンマー連邦共和国）との交流と友情の架け橋になりたいという想いから設立された法人がありました。NPO法人「JAMBOF（Japan And Myanmar Bridge Of Friendship）」（理事長 尾花 隆司 会員60名）です。東南アジアのインドシナ半島西部に位置するミャンマーは、近年になって民主化への道を歩み始め、経済発展の兆しがみられるものの、多くの人々が貧しい生活を余儀なくされています。そのため、子どもたちの就学や養育が困難な状況なのです。「設立当初は、小学校建設や孤児院の運営なども行っていました。現在は無理せず、息の長い継続的な活動をしていこうと、皆で話し合っ



移動図書館*



『JAMBOF通信 サンダーモン』



ミャンマーの子どもたちとの交流風景*



絵本を熱心に読む子どもたち*



竹守 睦さん

竹守 伸一さん

ます」と教えてくれるのは、竹守伸一さん。同法人の副理事長を務める伸一さんの横で、奥様で事務局担当の睦さんが穏やかな笑顔で話します。具体的な活動は、日本国内では、毎年夏に「農業公園ベルファーム」で開催される国際交流イベント「松阪やたいむら」をはじめとして「氏郷まつり」などの各イベント

に参加して情報発信する活動。一方、ミャンマーでは、僧院学校への支援、移動図書館の活動ボランティアツアーの実施などです。僧院学校への支援は、ヤンゴン市近郊にある2つの僧院学校に鉛筆とボールペンを贈るとい



「ミャンマーバザール」*



「松阪やたいむら」*

本の文具は上質なため、とても喜ばれるのです。また移動図書館は、車の中を図書館にして、僧院学校などを定期的に巡回するというもの。現在の蔵書は400冊ほどで、ミャンマーの児童書に加えて、日本の絵本を送り、現地スタッフが1冊ずつ翻訳しています。今後も送り続けて蔵書を増やしていく予定です。

そして、毎年年末に実施されるボランティアツアーでは、第二次世界大戦で命を落とした日本人兵士が眠る日本人墓地や、パゴダ（仏塔）などを見学するほか、子どもたちとの交流も図ります。同法人が定期的に発行する『JAMBOF通信 サンダーモン（希望の意味）』には、子どもたちが移動図書館の絵本を熱心に読んでいる姿や、絵本を「読んで！」とキラキラした目でお願

いする姿、一生懸命に話を聞いてくれる姿に、参加者が感動した話などが綴られています。

純粋で心豊かなミャンマーの子どもたちの姿が心を揺さぶるのでしょうか。

このことは竹守さん夫妻も同様で、ミャンマー人のある女性との出会いがきっかけで、法人運営に関わることになったのだといいます。その女性の名は、ティンティン・エーさん。研修のために来日した際にホームステイ先となったのが、夫妻の家だったのです。彼女の清楚な姿勢、物欲のないこと、朝起きると30分間の瞑想をして、僧侶や家族の健康のために祈りをするなどなどに感心し、すっかり魅了されたといいます。以来、国境を越えた家族ぐるみの交流が続き、今も頻りに連絡を取り合っていると同いりました。国際交流、国際支援とは、家族や友人を思いやり、寄り添うことと変わりは無いのでしょうか。



僧院学校へ寄付した鉛筆とボールペン*



僧院学校に文具を渡した際の様子*

お問い合わせ
NPO法人「JAMBOF」
TEL 0598・599・1586

*印の写真は取材先から提供していただきました

「こころと心を伝えてまわる」多文化共生の町づくり

NPO法人 伊賀の伝丸

【伊賀市上野東町】

「帰国して、伊賀市には外国人が多く暮らしていることに気が付きました。それで最初は、海外生活経験者として、何かできることがあればと思ったのです」と、NPO法人「伊賀の伝丸」設立当時を振り返るのは、代表理事の和田京子さん。慣れないインドネシアでの生活の中、現地の友人に助けられた恩返しを、故郷に暮らす外国人たちにしてあげたい、まずは皆で楽しくお茶会でもと軽く思ったのが、きっかけだったといいます。



和田京子さん

しかし、平成11年に通訳・翻訳NPOとなり、同17年に法人格を取得するに従い、気軽に考えていられないことになりました。たとえば、予防接種の受け方、確定申告の仕方などがわからない外国人に、間違った通訳をしては大変なことになります。そのため、行政機関や、行政書士・弁護士などの各部門の専門家たちとの緊密な連携が必要になりました。こうして、事業の深さと幅が広がっていったのです。

通訳・翻訳事業、多文化共生生活相談、講師派遣、外国語講座など、多文化共生に関わるさまざまな事業を手掛ける同法人の注目すべき特徴は、対応言語の多さ。英語はもとより、ポルトガル語・スペイン語・中国語・韓国朝鮮語（ハングル）・タイ語・ベトナム語・インドネシア語タ



日本語講座修了式*



さまざまな言語に対応したパンフレット



子どもと保護者の連携ガイダンス「ガイドブック」



フードバンク活動*

ガログ語などとなっています。また、通訳事業から派生して、平成15年に結成されたのが、通訳観光ボランティアガイド「伊賀SGGクラブ」。個人や少数の外国人観光客グループに、きめ細かな対応をすることで、伊賀の魅力を発信しようと考えていると伺いました。

さらに、「伊賀市国際交流協会」が行う学習支援施設「ささゆり」や、余剰食品などを厳しい生活の中で頑張っている人たちへ配布する県内外の各フードバンクへの協力など、各種団体との連携も、積極的に行っています。

「インドネシアで暮らしていた時に、どこの国の人にも悩みはあるし、皆一緒なんだと気付きました」と話す和田さん。「伊賀の伝丸」設立当初は、日本に暮らす外国人が暮らしやすいようにサポートできたらと考えていましたが、今後は日本人・外国人という枠組みだけでなく、男



平成25年の新年会*

性・女性、さらには障害のある人たちなど、マイノリティ（社会的少数者）も含めて、それぞれが力を発揮できるように、「こころと心を伝えてまわる」といふことへと広がってきたともいいます。そして、伊賀市がお互いの違いを理解し合える多文化共生の町になれば、幸せだとも話してくれました。

これからも、忍者のようにひそやかに、けれども身軽で着実に歩みが続くことでしょう。



NPO法人「伊賀の伝丸」事務所

お問い合わせ

NPO法人「伊賀の伝丸」
TEL 05995・233・0912

*印の写真は取材先から提供していただきました

世界へと飛び立つ、子どもたちのために

鳥羽国際交流ボランティアの会

〔鳥羽市〕

「This is a pen!」
「This is a table!」

うらかな春の日、鳥羽市内の旧小浜小学校内に、子どもたちの明るい声が響きます。

「3月19日に鳥羽市民会館で行う『KOKUSAI KIDS CLUB発表会』に向けてリハーサルを行っています。今は、英語の発表の練習中です」と教えてくれるのは、「鳥羽国際交流ボランティアの会」代表の山本光子さん。同会の設立は平成7年



山本 光子さん

鳥羽を訪れる海外からの観光客や定住する人たちの助けになればと考えたのが発端だといいます。

現在の会の主な活動は、「鳥羽国際交流協会」が主催する、日本語教室「ほんご工房」への講師派遣や、フィリピン・タイ・ロシア・ジャマイカ・メキシコなど多彩な国の人たちが、自国の料理の作り方を教える「世界の料理教室」、それぞれの国の人たちが、国旗や硬貨などを使って自国の文化や生活習慣の紹介をしたり、ゲームを一緒にすることで、子どもたちと交流を図る「インターナショナルだよ鳥羽の子どもたち」、そして、現在リハーサル中の「KOKUSAI KIDS CLUB」です。次世代を担う子どもたちのために、国際交流の視点からでき



ヒップホップダンスの練習

ることは何かと考えると、11年前に始められました。市内全域の各小学校の3年生から6年生が参加しています。

各週土曜日に行われる授業は、英会話・英語教材・ヒップホップダンス・チャレンジ(工作・お菓子作り・ハンドベル)と、充実した内容。そのレベルも高いのが特徴で、英語はALT(Assistant Language Teacher)の略。外国語指導助手)講師が、ダンスは松阪市在住のダンサー



ジョナリン・バルサナ・山田講師と談笑する子どもたち

など、その道のスペシャリストたちが指導しています。

山本さんの話を伺っている間もリハーサルは続きます。すると、フィリピンからALT講師として来日し、現在は津市在住のジョナリン・バルサナ・山田さんが発音する英語の頭文字を、子どもたちがボードに書いていきます。中には、傘を意味する「Umbrella」という難しい単語もありましたが、ほとんどの子が間違わずに「U」と書いて



英語の練習風景

たのには感心しました。休憩中の子どもたちに授業のことを尋ねると、「英語が一番難しいけど、楽しいよ」と弾んだ声で答えてくれました。

「鳥羽市は、カリフォルニア州サンタバーバラ市と姉妹都市となっていて、両市の中学生が交換留学を行っているのですが、『KOKUSAI KIDS CLUB』の修了生たちは優秀だと喜ばれます」と山本さん。そこには、高レベルを維持するた



「KOKUSAI KIDS CLUB発表会」

めに、スタッフ一丸となって、手探り状態でここまでやってきたからという感慨が感じられました。

青ききらめく海に見守られながら、国際感覚も身に着ける鳥羽の子どもたち。近い将来、彼らが世界をめざして飛び立ち、活躍する日が来ることでしょう。

お問い合わせ

「鳥羽国際交流ボランティアの会」
TEL 0599・26・2378
(山本 光子代表)

※印の写真は取材先から提供していただきました